

日本分析化学会第73年会開催報告

1 はじめに

標記年会は、2024年9月11日(水)～13日(金)の日程で名古屋工業大学にて開催された。名古屋工業大学は最寄り駅から徒歩10分と利便性がよい会場であったが、今年は記録的な暑さで、9月中旬だというのに会期中は連日の猛暑日が続いていた。そのためか、受付を設置したNITech Hallの涼しさにほっとした顔をする参加者が多く見受けられた。今回の年会は8年ぶり2回目の本部主催であった。本部主催の場合、実行委員は関東支部から構成することが定められている。そのため、東京近郊で年会が実施できる場所の選定を行ってきた。しかし、広さ、日程、交通事情など様々な条件を満たせる会場が見つけれなかった。その後紆余曲折を経て、名古屋工業大学を会場とすることができた。大学を会場とする場合、その大学の先生方のご協力が必須で、多大なご尽力をいただくことになる。現地担当として名古屋工業大学の先生にも実行委員として参加いただいた。また、7年の間に組織として年会・討論会実行委員会が設置され、この委員の皆様により、本年会の実行委員も担当いただくこととした。このように、実行委員会が通常と異なる編成となった。

参加人数は1166名、講演件数は口頭発表236件、ポスター発表328件(一般ポスター113件、若手ポスター212件、高校生ポスター3件)、受賞講演10件、研究懇談会講演20件、シンポジウム講演17件であった。



2 一般講演

5月に開催された第84回分析化学討論会では、講演分類をこれまでの分析手法によるものから分析対象を軸としたものに大きく変えて実施された。年会は、討論主題は設定されないこと、これまでの継続性も重視したいことなどを踏まえ、分類の軸は昨年の熊本年会を踏襲した。また、口頭発表とポスター発表時間が被らないようにプログラムを編成し、会場の行き来で講演の聴講をあきらめることがないようにした。口頭発表の各分類での発表件数を表1に示す。

表1 講演分類と発表件数

分類	発表件数
1: 原子スペクトル分析	15
2: 分子スペクトル分析	10
3: レーザー分光分析	6
4: X線・電子分光分析	5
5: 放射線・磁場	1
6: 電気化学分析	18
7: センサー	19
8: 質量分析	3
9: マイクロ分析	7
10: FIA	6
11: LC	10
12: 抽出	5
13: GC	3
14: 分離・分析試薬	7
15: 反応基礎論	11
16: 標準物質, データ処理	0
17: 界面分析	6
18: 微粒子分析	14
19: 環境分析	21
20: 材料分析	14
21: 食品・医薬・臨床	10
22: バイオ	45





例年、バイオの分類での発表件数が多いことから、3日間2会場で実施した。満席に近い会場もあり、各会場ともに活発に発表が行われた。大会期間中は猛暑日が続く、暑さでマイクが不調に見舞われた会場もあったが、会場担当の実行委員及び学生アルバイトに臨機応変に対応いただき、発表を続けることができた。

3 ポスター発表（若手ポスター、高校生ポスター）

ポスター発表は、NITech Hall で実施され、ホールの1階と2階にポスターボードを配置した。今回は、1講演当たりボードを2枚利用し幅180cmとした。A0ポスターを横長で掲示できるスペースがあったことで発表者間に余裕ができ、聴講者が多くても窮屈にならずに発表できたことは、参加者からも好評であった。また、ホール内は冷房が効いていたため、集中して討論ができたと思われる。ポスター発表時間に合わせて、会場に紙パック飲料を準備したが、手軽に水分補給ができる点が好評であった。本年会では、若手ポスターは212件の講演申し込みがあり、これらは1日目、2日目に渡り3セッションで発表が行われた。若手の会担当の実行委員より参加者に審査を依頼したところ、多くの方々のご協力を得ることができた。たくさんの方々との多角的にディスカッションすることで、発表者にもよい刺激になったと思われる。厳正な審査の結果、合わせて22名が若手ポスター賞を受賞した。

高校生ポスターも実施した。発表を始める前は少々緊張も見られたが、発表内容も充実していて、しっかりと質疑応答がなされていた。発表者からは得難い経験ができたという好印象だった。小中高校生を対象にしてジュ



ニア会員制度もあり、高校生のうちから一般の研究者に混ざって対等に議論ができる場は貴重であり、このような発表の場があることは有意義だろうと思われる。今後、ポスター発表参加者を増やすために、存在を周知させる取り組みが必要であると感じた。

4 シンポジウム

本年会では、三つのシンポジウム講演が行われた。1日目は「産業界シンポジウム」が開催された。テーマは「社会課題の解決に貢献する分析化学」で、環境・健康・エネルギーなどSDGsの観点で企業の分析部門がどのように取り組んでいるか事例が紹介された。産学からの報告があり、共通の問題として認識され、討論が交わされた。2日目は「大谷先生の業績を振り返って」と題してシンポジウム講演が行われた。昨年急逝された大谷肇前会長と深いつながりがあった講演者が、それぞれの視点から大谷先生の姿を語り、先生のお人柄が偲ばれる時間となった。3日目は「公開シンポジウム：文科省科研費学術変革領域研究(B)「細胞から環境水へと繋ぐスケール横断分析」網羅的の化学情報の取得を可能とするセンサの実現」が開催された。一般への公開シンポジウムであったため、今回は名古屋観光コンベンションビューロー経由で、名古屋市内の生涯学習センター及び市内図書館にチラシを配架して周知を図った。

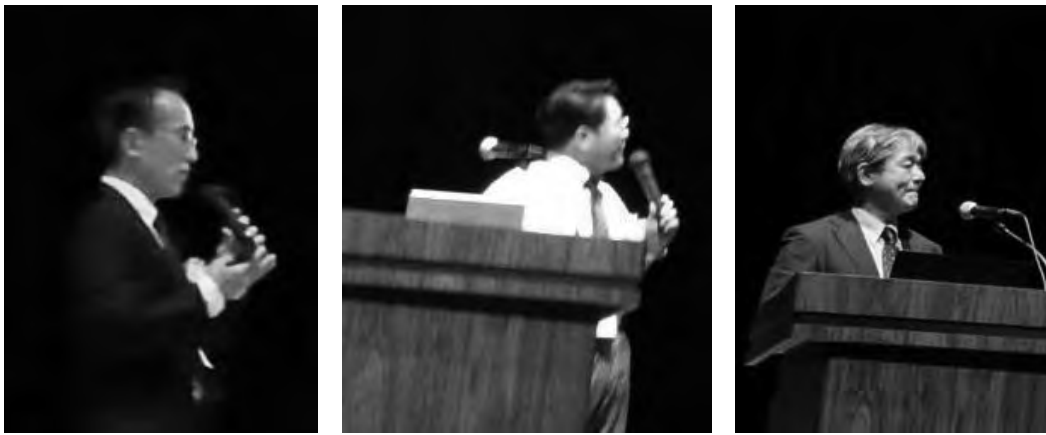
5 授賞式・受賞講演

各賞の受賞講演は、内容の近いセッションに組み込んで実施した。今年の受賞者は次の通りであった。奨励賞：熊谷将吾氏、宋和慶盛氏、外間進悟氏、中村圭介氏、先端分析技術賞：小池雅人氏、寺内正己氏、村野孝訓氏、大上裕紀氏、越谷翔悟氏、垣尾翼氏、女性Analyst賞：西垣敦子氏、中川沙織氏の各氏である。

2日目の午後には、年会会場である名古屋工業大学に隣接する鶴舞公園内の岡谷鋼機名古屋公会堂にて授賞式が執り行われた。上記の受賞者に加えて、学会賞、学会



論文賞賞状を授与される木村凜太郎氏



学会賞受賞講演（左から 井原敏博氏，坪井泰之氏，藤浪眞紀氏）

功労賞，「分析化学」論文賞及び有功賞の受賞者が出席された。学会功労賞は齋藤徹氏，茶山健二氏が受賞された。「分析化学」論文賞は浦田泰成氏，松山嗣史氏，井上史之氏，辻幸一氏による「共焦点型微小部蛍光 X 線分析法による爪試料の元素イメージング」；木村凜太郎氏，萬年一剛氏，熊谷英憲氏，松井洋平氏，伊規須素氏，高野淑識氏による「箱根温泉・大涌谷の「黒たまご」黒色物質の起源推定」が受賞した。受賞した木村凜太郎氏は高校生で，この快挙についてはプレスリリースが発表され，当日はメディアの取材も行われた。今後，ジュニア会員による論文投稿の活発化と，学会の活性化にもつながるのではないかと期待される。授賞式の後には同じ会場で学会賞受賞講演が行われ，井原敏博氏，坪井泰之氏，藤浪眞紀氏の3氏が壇上に立たれた。各氏の研究に対する熱い姿勢がうかがえる講演であった。

6 企業展示及びランチョンセミナー

今回は，ポスター会場の1階と同じ場所で企業展示を行った。先に述べたようにポスター発表時間は参加者が会場に集まるため，多くのブースで話し込む姿が見られた。広い会場が少々混みあってしまったが，飲み物を取りながらゆっくりと時間を使って話ができたとのご意見もいただいた。配置としてポスターの周りにブースが設置されている状態は好評だった。ランチョンセミナーについては，各日，朝から長蛇の列ができており，いずれのセミナーも準備した整理券はすべて早い段階で配布が完了した。ランチョンセミナーが開催されることが参加者に浸透しており，有意義な時間になっていることがうかがえる。また，2日目には日本分析化学会女性研究者ネットワーク主催で「みんなのキャリアデザイン交流会」が，株式会社リガクのスポンサーシップで開催され，参加者どうしの交流を深めていた。例年と同様，やはり整理券を持っていないながら参加しない方もおり，参加できない可能性があるなら持って行かない，参加できなくなったら早い時点で整理券を返すなど，周囲への配

慮を持った行動が求められる。

7 ものづくり技術交流会

「ものづくり技術交流会 2024 in 東海・関東」が分析イノベーション交流会主催，村上博哉氏を特別実行委員長として2日目に開催された。ものづくり技術交流会は，年会，討論会に合わせて企画されており，企業と産学官の研究者，技術者との間の共同研究の促進を目的とした交流イベントである。今回も東海・関東地方を中心に展開している企業のご協力を得て展示交流会とレクチャー講演が行われ，多くの参加者が来場され盛況だった。

8 懇親会

懇親会は，授賞式，受賞講演を開催した岡谷鋼機名古屋公会堂の四階ホールで開催された。この建物は，歴史が古く文化的な建築物でホールは天井も高く格調高い雰囲気であった。東海林敦氏及び高橋由紀子氏の司会により，和やかに懇親会が始まった。実行委員長，日本分析化学会会長の挨拶に続き，来賓として日本分析機器工業会（JAIMA）理事で日本分光株式会社代表取締役社長の佐藤賢治氏からご挨拶をいただいた。その後，年会特別



実行委員長の津越敬寿氏の音頭で鏡開きが行われ、懇親会が始まった。参加登録番号による抽選が行われ、鏡開きにフロアからも参加いただいた。故大谷肇前会長ゆかりの日本酒も準備されていたが、参加者が集中し早めに完飲されたようである。コロナ禍の制限もなく自由に懇談している参加者の方々の会話も弾んでいるようで、実際に顔を合わせての交流は大切な時間であることを改めて感じた。会の途中で2025年度に開催される第85回分析化学討論会実行委員長である愛媛大学朝日剛氏、第74年会実行委員長の北海道大学渡慶次学氏、そして第74年会と同時に開催されるASIANALYSIS実行委員長の東京大学小澤岳昌氏からそれぞれスピーチをいただいた。最後に本年会特別実行委員長の手嶋紀雄氏よりご挨拶をいただき、盛況のうちに会はお開きとなった。参加者は281名であった。

9 おわりに

本部主催の年会ということで、各方面の先生方にお世話になった。特に会場をお借りした名古屋工業大学の先生方には準備期間最後の一月は高負荷となってしまった。年会・討論会で話題になっているConfit及びプログラム作成に関しては、Confit小委員会の平山氏、津越

氏がすべて引き受けて実施いただいた。Confitのシステムも回を重ねるたびに使いやすいようにカスタマイズされてきているようである。ではあるが、誰でもすぐ使えるようになるものではない。仕事が個人に張りつかない仕組み作りが急がれる。年会の成功は、実行委員の先生方だけではなく、学生アルバイトの皆様の精力的な働きがなければ成しえなかった。細かい作業や突然の依頼にも快く対応いただき、実行委員各位からも称賛の声が多かった。実行委員及び学生アルバイト間の連絡手段として、京都での討論会において使われたLINEオープンチャットを活用した。このツールが大変便利で、問題が発生しても誰かがすぐに反応して対応することができた。もっと便利なものも開発されるかもしれないが、今後も活用をお勧めしたい。

第73年会に参加された皆様にとって、日頃の研究成果に対して白熱した討論ができ、情報交換、人脈形成など交流が深まった3日間になったのであれば幸いである。末筆になったが、展示、セミナー、広告等でお世話になった企業の皆様、そして参加いただいた会員の皆様に実行委員会を代表して深謝申し上げます。

〔株式会社コーサー 安田 純子〕

原 稿 募 集

「技術紹介」の原稿を募集しています

対象：以下のような分析機器、分析手法に関する紹介・解説記事

- 1) 分析機器の特徴や性能および機器開発に関わる技術、
- 2) 分析手法の特徴および手法開発に関わる技術、
- 3) 分析機器および分析手法の応用例、
- 4) 分析に必要な試薬や水および雰囲気などに関する情報・解説、
- 5) 前処理や試料の取扱い等に関する情報・解説・注意事項、
- 6) その他、分析機器の性能を十分に引き出すために有用な情

報など

新規性：本記事の内容に関しては、新規性は一切問いません。新規の装置や技術である必要はなく、既存の装置や技術に関わるもので構いません。また、社会的要求が高いテーマや関連技術については、データや知見の追加などにより繰り返し紹介していただいても構いません。

お問い合わせ先：

日本分析化学会『ぶんせき』編集委員会

〔E-mail : bunseki@jsac.or.jp〕